

なぜ、わかっていても動けないのか

MUFGシニアライフ研究所 主任研究員 くろかわ ひろあき 黒川 弘明



金融庁の調査では、資産運用を始めていない理由として、「資産運用に関する知識がない」、「余裕資金がない」といった回答が多く見られます※。確かに、それらも大きな理由なのでしょう。ただし、それだけでは説明しきれないことがあるようにも思います。わかっていても動けないということもあるのではないのでしょうか。

健康診断の結果を見るたびに、少し気になる数字があります。体重、血圧、コレステロール。医師からも言われます。「少し運動した方が良いですね」。運動不足が体に良くないことは知っています。将来、健康を損なう可能性があることもわかっています。それでも、今日の仕事を優先し、明日から始めようと思い、そのまま数か月が過ぎていきます。

資産運用も似ています。NISAという制度があります。確定拠出年金もあります。長期・分散・積立が有効ということもよく耳にします。政府も資産形成を後押ししています。情報も十分にありますが、それでも、なかなか始められないものです。私自身もそうでした。このコラムでは、老後に備えた資産運用がなかなか始められない理由を考えてみたいと思います。



ある程度知っている。必要なことも分かっている。それでも動けない。例えば、防災用品を備えなければと思いながら、その対応を後回しにする。こうしたことも、同じ構図ではないのでしょうか。なぜ、このようなことが起きるのでしょうか。

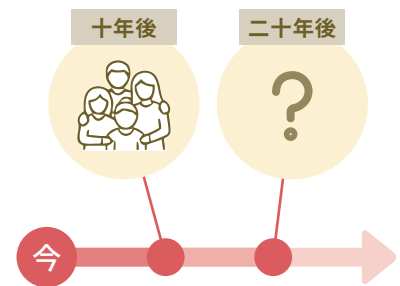
私自身の資産運用の例で考えてみたいと思います。当時、資産運用の仕事に携わっていたからといって、将来のことを真剣に考えていたわけではありません。むしろ逆で、老後の話は重要だと思っていながら、どこか「いつか考えるべきこと」になっていました。目の前には仕事が山のようにありますし、家族のことあれば、毎月の生活もあります。



次ページへつづく ▶

今日やらなければいけないことはたくさんあります。そうした毎日の中で、老後は遠い先の話でした。不思議なもので、今日や明日の予定には真剣になれるのに、十年後、二十年後となると急に現実感が薄れてしまいます。

現実感を失う境界線がどこにあるのかははっきりしません。その時の環境や年齢、健康状態によっても変わるのでしょう。私たちはこうした曖昧さを抱えながら日々を過ごしています。わかっていても動けないのは、「今すぐやらなければならないことだ」と感じられないことが理由の一つかもしれません。



こうしたことから日々の行動を考えてみると、私たちは思っている以上に目の前の出来事に強く引き寄せられているように感じます。今日の仕事、来週の予定、今月の支払い。これらははっきりと現実のものとして感じられます。一方で、十年後や二十年後のことはどうでしょう。頭では理解していても、どこか遠い話のように感じられてしまいます。

老後に備えた資産運用も同じです。老後は誰にでも訪れますし、年金だけでは十分ではないかもしれません。多くの人がそう感じていると思います。それでも、今すぐ行動する理由としては弱い。それは、おそらく、現実感が伴っていないからです。このように、「わかっていても動けない」ということは、必ずしも意思の弱さだけで説明できるものではないのだと思われます。



そう考えると、資産運用が始められない理由を違った角度から見るができます。将来を少しでも身近に感じる工夫や、未来を自分自身の問題として捉えるきっかけをつくること、それも有効なのかもしれません。私自身は、自分の資産を一覧表にしたとき、初めて老後が「少し」現実のものとして感じられました。資産運用というと、投資信託やNISAを

思い浮かべる方が多いと思います。もちろん、それらは重要です。しかし、その前に考えるべきことがあるのかもしれません。

なぜ、わかっていても動けないのか。その理由を考えることが、資産運用の第一歩なのかもしれません。

※金融庁「リスク性金融商品販売に係る顧客意識調査結果」(令和6年7月5日)より。投資未経験者が金融商品を購入していない理由として、「資産運用に関する知識がない」「余裕資金がない」との回答が多く見られた。

意見にあたる部分は著者の見解であり、MUFGシニアライフ研究所の見解を代表するものではありません。なるべくわかりやすくするために、大幅に省略・簡略化した表現としています。個別具体的なことについては、専門家に具体的にご相談ください。本資料の無断複製、複写、転送等のご遠慮ください。

◆MUFGシニアライフ研究所は、三菱UFJ信託銀行がシニアライフに関する調査・研究・レポート作成等の業務を対外的に行う際の呼称です。